

平成27年度 就実大学大学院・就実大学・就実短期大学の中期目標・中期計画に基づく各部局年度計画及び実行計画と達成状況

部局名（学部又は事務部）：

学科名： 大学院教育学研究科

平成28年3月31日

中期計画	中期計画期間中の具体的な取組・実行内容	部局および学科における27年度計画と実行計画		計画達成状況	担当者評価	学長評価
		平成27年度計画	平成27年度実行内容			
		(左欄の具体的な取組・実行内容に基づいて計画する。さらに、新たな取り組み等について計画実行する)	(平成27年計画の具体的な実行内容を具体的に且つ定量的に記載する)	上段：中間報告 下段：最終報告		
I 大学ステークホルダーに対して提供するサービスその他の業務の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置 1 教育に関する目標を達成するための措置 (1) 教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための措置 1) 入学者の確保に関する具体的方策						
①ディプロマポリシーを十分に達成できる有能な人材確保を明確化し、受験生に周知徹底する。	①学生募集内容の再検討や広報紙へディプロマポリシーを分かり易く反映する。各学部や学科紹介記事の精査を行う。	①アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーを策定し、大学ホームページや広報誌等に掲載して周知をはかる。	①教育学研究科の目指す教育内容や目標について、就実大学全体の広報メディアに載せるとともに、教育学研究科独自の広報メディアを作成する。また、教育学研究科独自のオープン・キャンパスを開催するなどして、周知をはかる。	【中間】3つのポリシーを策定して、ホームページ等で公開するとともに、従来は人文科学研究科と一緒にであった、広報パンフを独自なものとして作成し頒布した。 【最終】 【中間】に同じ。		○
【大学院課程】						
④大学院修了時の高度専門職業人としての学力や社会人適応力及び大学院における教育効果を総合的に検証し、継続的に入学者選抜方法を改善する。	④大学院卒業後と入学前教育に関するエンロールメント・マネジメントを整備・推進する。	学生の生活、修学、就職についての指導体制を作る。	教育学研究科の学生担当を中心に、定期的に学生との面談の機会を設けるなど、学生生活のサポートをはかる。	【中間】学生担当を中心に学生として対応面談して、学生のニーズを把握するとともに、随時、院生室に関しても学生の意見を聴取して改善に努めている。 【最終】 【中間】に同じ。		○
⑤専門職職業人養成のため、学部課程を含む6年一貫教育を検討し、その具体化を図る。	⑤専門職職業人養成に特化した高度な教育の実施を検討し、その実施体制を整備する。	教育学部教育との連携を検討する。	教育学部将来構想との関係を検討する。			×
⑤専門職職業人養成のため、学部課程を含む7年一貫教育を検討し、その具体化を図る。	⑤専門職職業人養成に特化した高度な教育の実施を検討し、その実施体制を整備する。	教育学部教育との連携を検討する。	教育学部将来構想との関係を検討する。	【中間】教育学部の改組の検討は、教育学研究科に照応する方向に向かっており、学部の将来構想との関係では、当面は変更の必要を認めない。むしろ、教育学部の将来構想を教育学研究科との連続性を高める形にすることを望んでいる。 【最終】 【中間】に同じ。		△

<p>【大学院課程】</p> <p>⑥専門職業人育成の観点から、6年制一貫教育システムとして柔軟なコース制の検討と実行する。</p>	<p>⑥大学院課程の教育は、学士課程カリキュラムと有機的に連携し、学部から大学院までを考慮した継続性のあるカリキュラムの再編整備を行う。なお、カリキュラムの再編は、各大学院や専攻分野の急速な進歩や研究の進展そして国際化に迅速に対応可能なものとする。</p>	<p>現在は学年進行中であるため、ただちにカリキュラムの変更はできないが、将来的に、教育学部の教育課程と連続性をもつカリキュラム編成の検討を継続的に実施する。</p>	<p>教育学部との継続性を担保するようなカリキュラム編成に向けて、問題点の洗い直しをする。</p>	<p>【中間】とくに公認心理士養成のための大学院レベルでのカリキュラムの検討を始めている。ただし、学年進行中なので、実施は再来年度からとなる。</p> <p>【最終】 【中間】と同じ。</p>	<p>△</p>
<p>3) 優れた教員の確保に関する具体的方策</p>					
<p>①グローバルな人材育成の観点から、国際的に活躍できる教職員を積極的に受け入れる体制や制度を整備する。</p>	<p>①優れた教員採用基準として、博士の学位を有し、国際活動に興味を持ち、授業を英語で実施できる人材の登用を目指す。</p>	<p>全学の人材登用方針の提案を受けて、教育研究科の人材登用方針を検討する。</p>	<p>全学的な人材登用方針との整合性のある人材登用を行う。</p>	<p>【中間】学年進行中であるので、新たな人材登用する余地はないが、研究科設置にあたり、全学の方針である博士の学位保持者、英語に堪能な教員の採用に努めた。</p> <p>【最終】教育学研究科の教員は1名を除いて、すべて教育学部所属であり、教員の人事権は、基本的に教育学部教授会にある。ただし、研究科担当については、明確な基準を設けて任用しており、博士の学位を有する教員、及び国際的活動に意欲的な教員を、多く配置している。</p>	<p>○</p>
<p>③学内FD活動を通じて、組織的教育体制・システムの構築とその実質化を目指す。</p>	<p>③-①学内FD活動の実質化を目指すし、学生FD組織を立ち上げ教育の質の改善を推進する。</p>	<p>全学的に構築されたFD体制の一翼を担う。</p>	<p>全学的に構築されたFD体制のもとで、FD活動を実施する。</p>	<p>【中間】全学的に実施されるFD講演会には、積極的に参加している。少人数教育のため、授業評価アンケートは有効ではないので実施していない。</p> <p>【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>×</p>
<p>4) 教育の質の向上及び改善に関する具体的方策</p>					
<p>①全教科についてアクティブラーニング授業を推進するための課題の抽出やその解決策を見だし、就実大学の教育の質の転換と保証を実施する。</p>	<p>①教育の質転換のため、カリキュラムポリシーに基づいて全教科に能動的学修（アクティブラーニング）手法を取り入れた授業を実施する。具体的なアクティブラーニング手法の開発や運用は、アクティブラーニング検討WGが行う。</p>	<p>教育学研究科の授業の多くは、既にアクティブラーニングにもとづく授業となっている。アクティブラーニング検討WGの提示した、アクティブラーニングを取り入れた授業の実施を検討する。</p>	<p>教育学研究科で実施しているアクティブラーニングにもとづく授業の一層の充実をはかる。</p>	<p>【中間】本研究科の授業形態は、アクティブラーニングそのものといってよい。今後とも、この方式で実施し、充実して行きたい。</p> <p>【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>△</p>
<p>②授業シラバスの作成者や内容の再検討を実施し、学生の学びにシラバスがなくてはならないものとする。シラバス内容の第三者評価を行う。</p>	<p>②学生の授業のために学修達成度目標を明確にし、主体的に事前の準備や事後の展開などで十分な学修時間が確保できる基本となる授業計画（シラバス）の充実を行う。シラバスは該当分野の複数の教員で作成し、その内容に関して外部識者の評価を受ける。定期的に、学生の学修時間の調査を実施し、シラバス作成に反映させる。なお、シラバスには、具体的な標準学修時間の目安を示す。</p>	<p>全学的に検討されて提示されたシラバス作成方針や評価方法に整合する、教育学研究科のシラバス作成を行う。</p>	<p>教育学研究科におけるシラバスが、全学的に提示されたシラバス作成方法と整合性をもつしくみとなるよう点検検討する。</p>	<p>【中間】本研究科のシラバスは、全学的な作成方法と整合的になっている。今後とも、その方向で改善して行きたい。</p> <p>【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>○</p>

<p>③ディプロマポリシーに基づいた教育の質保証は、自己点検委員会による検証と大学基準協会等の第三者評価により行い、その評価より教育の改善等を実施する。</p>	<p>③-①教育の質の保証は、教職員に課せられた重要な責務であることから、真摯な姿勢で自己点検や第三者評価により得た知見を効果的な改善につなげる。自己評価制度システムの再構築を行う。</p>	<p>教育の質向上に向けた自己評価について、全学的な提案を受けて検討する。</p>	<p>全学的に再構築された自己評価システムのもとで、教育学研究科における自己評価を実施する。</p>	<p>【中間】教育実施の中での自己評価をしているが、全学的自己評価システムの再構築を受けて連動する用意はある。 【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>×</p>
	<p>③-②教育の質の改善などに向けて、同僚の授業参観や評価制度を導入する。</p>	<p>教育学研究科では、教育の質改善のために実施している、同僚によるピアレビューを、継続的に実施する。</p>	<p>授業改善のための意見交換会などを実施して、ピアレビューの充実をはかる。</p>	<p>【中間】本研究科の授業は、教人による共同実施のものが多く、随時に教員相互点検しあう形であるため、実質的なピアレビューになっている。 【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>△</p>
<p>④大学院教育においては、高度専門職業人等の養成の観点から実社会の最先端の知識等を取り入れた授業や学際的な内容を加味した体系的な教育を実施する。さらに、専門職学位に関しては、体系的な授業形態による着実な汎用力を有する実学指向とする。</p>	<p>④高度専門職業人養成の立場から、大学院授業にコースワークなどを取り入れた体系的な授業を推進する。また、専門職学位は質の保証ができる体制や内容で実施する。</p>	<p>教育学研究科では、教育臨床心理学コースをはじめ、コースワークを実施しており、今後とも充実させていく。</p>	<p>コースワークの充実・改善に向けての検討を継続する。</p>	<p>【中間】本研究科の授業は、教育臨床心理学コースにおいて、完全にコースワークになっている。今後も、これを維持拡大改善していく。 【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>○</p>
<p>5) 成績評価に関する具体的方策</p>					
<p>①全ての授業科目について履修者が到達すべき学修目標と成績評価基準をシラバスなどで公表し、学修到達度に対する厳格な成績評価を徹底する。</p>	<p>①全教科科目に対して、厳格な成績評価を実施するシステムと制度を構築し、学生学修力の向上と教育の質の改善を図る。</p>	<p>全学的に構築された成績評価システムのもとで、厳格な成績評価を実施する。</p>	<p>厳格な成績評価の実施を継続する中で、教育の質の改善につながる評価方法を検討する。</p>	<p>【中間】本年度は、研究科開設初年度であり、成績評価がまだ一度目の段階であるため、評価方法についての検討までには立ち至っていないが、厳格な成績評価は実施している。 【最終】本年度は、研究科開設初年度であり、評価方法についての検討までには立ち至っていない。今後、評価方法の検討を進めていきたい。厳格な成績評価は実施している。</p>	<p>○</p>
<p>③成績評価の共通性の観点からGPA制度を取り入れ、また授業形態に応じてルーブリックやパフォーマンス評価などの多様な評価法を検討し、可能な内容から実施する。</p>	<p>③-①厳正かつ多様な教育評価法を見だし、教育の質向上に資する。</p>				
	<p>③-②学生の留年率や退学率の低減に向けての部局での方策の検討・実施を推進する。5年以内で学部での退学率1%以下、留年率5%以下を目標とする。</p>	<p>主査、副査計三人のきめ細かい指導体制のもとで、修学面、生活面、さらに進路について十分なサポートをはかる。</p>	<p>現在の指導体制を継続しつつ、よりよいサポートの方策を検討する。</p>	<p>【中間】前期終了後にすべての院生の研究発表会も実施し、着実な指導を進めている。サポートの具体的方策や課題も見えつつある。 【最終】前期末、後期末に修士論文作成の中間発表会を行った。これは、単なる研究指導につづまらない。学生生活を検証する絶好の機会となっており、サポート体制のチェックも行われている。</p>	<p>○</p>
<p>(2) 教育の実施体制等に関する目標を達成するための措置</p>					
<p>2) 教育環境に関する具体的方策</p>					
<p>②学生学修意欲喚起や学修時間の確保に向けての学修e-ポートフォリオの導入に向けて、全学出動体制でその運営にあたる。</p>	<p>②教育効果や学生の履修状況・自学自修時間を把握するため、学修e-ポートフォリオや学修行動調査を実施し、教育改善に寄与する。</p>	<p>全学的に構築された学習e-ポートフォリオ等の教育改善方策の一翼を担う。</p>	<p>全学的に構築された学習e-ポートフォリオ等を実施するなかで、授業改善を進める。</p>	<p>【中間】全学出動体制による学修e-ポートフォリオが導入されれば参画する用意はある。 【最終】【中間】と同じ。</p>	<p>△</p>

③教育効果をあげるための多様な手段の導入と情報ネットワークを利用した教育システムへの展開も実施し、キャンパス外教育を推進する。	③教育効果をあげるため、授業形態に対応してe-ラーニングシステムやクリッカー、ICTを活用した双方向型授業システム等の導入試行など、情報ネットワークを通じた先進教育システムを展開し、さらに遠隔教育やオンデマンド型教育も視野に入	全学的に構築された、情報ネットワークにもとづく先進的教育システムを活用して、多様な授業形態の実施をはかる。	情報ネットワークにもとづく先進的教育を活用した多様な授業形態における教育効果について検討する。	【中間】情報ネットワークを利用した多様な先進的教育についての可能性を検討中である。 【最終】【中間】と同じ。		△
1) 教育の質の向上に関する具体的方策						
②教育効果の高い学生学業活性化にむけてのピアサポート制度の導入を実施する。	②学修支援スタッフやSA制度、TA制度の導入で、きめ細かな教育サービスを行い、学生の教育満足度を高める。	現在学年進行中であり、次年度に向けての検討課題とする。	ピアサポートを検討する。	【中間】本研究科の在籍学生は、開設初年度の学生6名だけであるが、相互に活発な議論をしかけている状況である。学年進行とともに、ピアサポートも可能となると思われる。 【最終】【中間】と同じ。		△
③外部教育機関や組織の力を借りて、実践力向上に向けた教育システムの構築とその整備を行う。	③-①本学の教育方針である「実地有用」の人材輩出にため、産業界からの課題提供や人材派遣による実社会に対応できる教育システムを導入し、実践力のある質の高い教育を推進す	学校園や教育行政と連携して、実地有用な人材輩出に向けての教育を企画する。	外部の教育関係者と連携して、授業や講座等を実施する。	【中間】県教委や施設など外部の関係者をゲストスピーカーとして招いて授業実施している。 【最終】【中間】と同じ。		○
	③-②学生の実態を把握するため、在学生を対象に学生生活実態調査を行う。その結果を集計・分析することにより満足度の検証や課題解決への方策を検討する。	全学の学生実態調査に協力し、その結果を検証する。	学生実態調査とその検証を踏まえて、学生の満足度向上の方策を検討する。	【中間】学生の勉学環境については、院生室問題で話し合いを実施して意向をくみ上げて改善につとめた。全学的に実態調査を実施する場合には協力したい。 【最終】【中間】と同じ。		△
(3) 学生への支援に関する目標を達成するための措置						
1) 学生支援・学生生活に関する支援の具体的方策						
①学生生活の振り返りから向上心を育成させるため、学生生活e-ポートフォリオの実施に向けて、全学出動体制でアカデミックアドバイザー制度を整備する。	①全学出動態勢で教員が複数の学生の面倒をみるアカデミックアドバイザー制度を導入して、きめ細かな学生生活支援を行う。学生指導においては、学生e-ポートフォリオを活用し、保護者との対応も学生担任や学科長の支援のもとに実施する。	全学的に構築されたアカデミックアドバイザー制度の一翼を担う。	アカデミックアドバイザー制度の実施により、学生の意識向上に努める。	【中間】全学出動体制のアカデミックアドバイザー制度が構築されれば協力する用意はある。本研究科では、学生1人に指導教員1名と副指導教員2名についているので、実質的なアカデミックアドバイザー制度を実施しているものと考えている。 【最終】【中間】と同じ。		△
②心身障がい学生のキャンパス活動の活性化に向けての支援体制や支援方法の整備を行う。	②個人的悩みを抱える学生、心身障がいのある学生、セクハラなどのハラスメントに直面している学生等に対して、適切な指導助言を行える専門的人員を配置し、カウンセリング機能の充実や健康管理などの体制を整備す	全学的に構築された、悩みを抱える学生支援制度の一翼を担う。	学生の悩みに向き合うなかで、教育学研究科における教育支援学の実践的深化と、教育内容、教育方法の向上をはかる。	【中間】上記のアカデミックアドバイザーと同様に、かなり個人指導の性格が強く、比較的学生の悩みを把握して対応しやすい体制である。複数指導教員制度であり、セカンドオピニオンも可能と考えている。 【最終】【中間】と同じ。		△

2 研究に関する目標を達成するための措置						
(1) 研究水準及び研究の成果等に関する目標を達成するための措置						
1) 目指すべき研究の方向性と水準に関する具体的方策						
①就実大学の特徴を最大限に活かして、国内外に通用する高度かつ中核的な研究拠点の形成を目指すとともに、研究活動を通じて、社会に活躍できる優秀な研究者や高度専門職業人を養成・輩出する。さらに、学際領域の研究を積極的に推進する。	①学問の進展に普遍的な重要性をもつ基礎・基盤研究を推進し、成果をあげるとともに、未知の分野を切り開く研究手法や研究過程を学生に修得させ、社会で活躍できる研究開発者や高度専門職業人養成につなげる。	教育学研究科は、実践的教育を重視して、社会に活躍できる高度専門職業人養成に向けた、教育課程と教育内容を構築している。	高度専門職業人としての実践的教育者の養成に向けた体制をさらに整備する。	【中間】本研究科は、高度専門職業人養成に向けて開設したものであり、その本来の目的のために体制の整備を進めていく。 【最終】【中間】と同じ。		○
3 その他の目標						
(1) 社会との連携や社会貢献に関する目標を達成するための措置						
1) 地域社会との連携に関する具体的方策						
②就実大学が有する教育資源を有効に活用した、学外教育サービスを実施し、地域への貢献活動を活発にする。	②本学が保有する教育成果や資料等の公開、公開講座の実施、サテライト教育やリカレント教育の推進など、地域における生涯学習の拠点としての責務を果たす。	全学的に実施する地域貢献に協力するとともに、研究科独自の地域貢献も検討する。	全学的に企画された公開講座等に参加すること及び研究科独自の公開講座等も実施する。	【中間】全学的に企画される公開講座等の担当は協力しているが、教育学部と教育学研究科所属教員は、1名を除いて重なっているため、研究科独自というわけではない。研究科独自のこととしては、心理教育相談室と連携して、研究科開設記念行事の講演会とシンポジウムを実施した。 【最終】【中間】と同じ。		○
2) 社会貢献に関する具体的方策						
①就実大学が実施している各種のグループ活動のオープン化や新たな組織活動を展開して、社会貢献事業を活発化する。	①本学の教育研究情報の提供、サイエンスカフェ等のオープン組織を通じた交流会の実施、地域における課題の研究等、本学が主体性を持った社会貢献事業を多面的に展開する。	全学的に企画する社会貢献事業に参画する。	全学的に企画される社会貢献事業に、要請に応じて、参画する。	【中間】全学的に実施している各種の活動には参加・協力しているが、大部分の教員が教育学部と重なっているため、研究科独自の参加協力ではない。 【最終】【中間】と同じ。		△
(3) 学園全体の連携等に関する目標を達成するための措置						
①就実学園組織内の教育組織と連携を密にして、学園全体の質の向上やブランドイメージの強化を図り、各組織の活性化を図る。	①社会的要請や環境の変化に適切に対応した組織運営の見直しを行うとともに、幼児、児童や生徒の発達や学びの連続性を勘案し、各機関との接続性を考慮した教育活動を行う。	学園全体の質の向上、ブランドイメージの強化に協力する。	学園全体の質の向上、ブランドイメージの強化のために、要請に応じて、参画する。	【中間】ブランドイメージ向上に可能な限り協力したいが、研究科独自の企画は今後の課題である。 【最終】【中間】と同じ。		△

(4) 後援会や同窓会との連携に関する目標を達成するための措置						
②卒業生との連携を強化するため、同窓会を通じた連携活動の活性化を推進する。	②同窓会を通じて、卒業生との連絡を密にして、学生の就職活動や勉学の向上に寄与するシステムや制度を立案・実施により、本学の価値を高める。	教育学研究科には、現時点では、修了生はいないが、修了生・卒業生との連携は、大学院・大学にとって極めて重要であるので、検討課題とする。	当面は、就実大学の学部・大学院の卒業生・修了生との連携を模索する。	【中間】開設初年度なので修了生はいないが、就実大学各学部各研究科と連携して、卒業生・修了生の連携に向けて、協力していく用意はある。 【最終】【中間】と同じであるが、人文科学研究科初等教育学専攻の修了生との連携を強めていきたい。		△
IV 自己点検・評価及び当該状況に係る情報の提供に関する目標を達成するために取るべき措置						
2 情報公開や情報発信等の推進に関する目標を達成するための措置						
①就実大学の諸活動の成果の公表は大学における責任義務との見地から積極的に広報活動を行い、本学の存在価値を高める。	①-①本学の教育内容、研究成果、社会貢献、財務状況、管理運営体制、など内容をホームページや広報に掲載とともに、既存の広報を見直して、外部情報機関に積極的かつ効果的に社会へ情報発信する。	全学のホームページの充実に協力するとともに、教育学研究科独自のホームページを作成する。	全学及び研究科独自のホームページにより、教育学研究科の教育、研究、地域・社会貢献等について、積極的に発信する。 また、教育学研究科の紀要を発刊して研究成果を公表する。	【中間】研究科独自のホームページを開設して、教育学研究科の教育・研究についての情報を発信している。また、就実大学教育学研究科紀要の創刊号を平成28年3月末に発刊に向けて準備中である。 【最終】【中間】と基本的に同じであるが、「教育学研究科紀要」創刊号は年度末に発刊を予定している。		△